

塘 茂樹(京都産業大学)¹
tomo@cc.kyoto-su.ac.jp

モラル・サイエンス・コネクションとは、ケンブリッジ大学独特の試験制度(1848)によって形成され、その欲張った改称(1969)とともに忘れ去られてしまった歴史的な存在である。その試験制度とは、モラル・サイエンス・トライポス(以下 MST と略する)であり、それがケンブリッジ独特であったのは、自然科学と対置された「モラル・サイエンス(Moral Sciences)」という総称が、ケンブリッジ大学以外でカリキュラム名称として用いられることがなかったという事情による。この特筆すべき「モラル・サイエンス」という名称を単なる「哲学」に置き換えるべきであるという提案が1968年6月17日になされ²、1969年1月29日に理事集會(Congregation)で承認された。これによって新学年から「モラル・サイエンス学部」は「哲学部」と改称されることになった。

この改称は、学習内容の変更を伴ったわけではない。改名前後の MST と哲学トライポスの試験内容規定³を比べてみればあきらかなように、単純な改名でしかなかった。確かに、その改称提案報告書にあるように、MST から法学、歴史、経済学といった科目が次々に独立し、モラル・サイエンスの内容が「哲学」を中心としたものに変化してきたのは事実であった。しかしながら、それはいささか欲張りすぎた改称であったように思われる。なぜなら、モラル・サイエンスに含まれない哲学の大きな分野が存在しているからである。それは、自然哲学であり、ケンブリッジでは、地質学者のアダム・セジウィック、植物学者のヘンスロウらによって1819年に設立された「ケンブリッジ哲学会」によって代表される分野であった。いうまでもなく、ヒューウェルを除いて、モラル・サイエンスに属する科目担当者が、この哲学会の会長⁴となったことは一度もない。

モラル・サイエンス・コネクションは、ケンブリッジ大学に様々な具体的な知的現象をもたらした。その代表的なものの一つがケンブリッジ大学モラル・サイエンス・クラブである。本報告の第一の課題は、同クラブに関する二つの問題に答えをあたえることである。

次に、このクラブの結成の契機となった MST とはいったいいかなるものであったのか？この問いに答えることが本報告の第二の課題である。その際、MST の試験科目および参考文献を歴史的に概観することによって、その全体像が浮き彫りにされるであろう。副産物として、なぜマーシャルが初期に「人間の心の分析」を試みたのかという背景が明らかとなるであろう。

さて MST とは、たかが学卒資格(BA)の試験に過ぎないのであって、知性史の展開においてどれほどの意味をもつのだろうか、というのはごく自然な疑問である。それを払拭するのに最適なエピソードを紹介することが本報告の第三の課題である。それは、なぜ大英帝国首都ロンドンではなく、ケンブリッジにおいてケインズ革命が実現したのかという問いに関わる。

「モラル・サイエンス・クラブ」問題

ケンブリッジ大学モラル・サイエンス・クラブは、グロート・クラブといった教員を中心としたモラル・サイエンスの討論クラブと異なり、もともと MST をめざす学生による平凡な勉強クラブであった。「MST に合格し MA になる前の大学所属者と MST をめざしている大学所属者すべてを有資格会員とし、学期中の毎週土曜日メンバーの部屋

¹ 報告者は、本務校の在外研究 A(2006年4月1日～2007年3月31日)によりケンブリッジ大学 Wolfson College の visiting scholar として研究に専従する機会を与えられた。本報告はその研究成果の一部である。

² *Cambridge University Reporter* 1968 - 69, p.623

³ (*Statutes & Ordinances*, 1967: p. 237ff; 1970: p.281ff)

⁴ 歴代会長のリストは Hall, Alfred Rupert (1969) *The Cambridge Philosophical Society: a history, 1819-1969* の巻末にある。

において開催される会合では、一つの報告論文によって提出された哲学関連の主題について議論を行う。」このチャールズ・ディケンズ編『ケンブリッジ事典』(1884年、71ページ)の説明は、1878年10月19日に同クラブが設立されたとき議決されたものであった。

実際に、この日セント・ジョーンズ・カレッジの一室で開かれた設立総会に参加したメンバーのうち3人はすでに MST に合格した先輩ジョニアンであり、…略

いずれにしても、この時から現在に至るまで、同クラブの活動内容は議事録に記録され、その一部は CUA に保存され、さまざまな伝記的研究の一次資料として用いられてきた。例えば、同クラブに参加し報告を行ったムア、ラッセル、ヴァイトゲンシュタイン、チューリンク、ポツパーなどの伝記叙述に用いられている。さらに、通史として同クラブを概観したものとしては、*Wittgenstein's Poker* や同クラブのホームページを挙げるができる。

しかしこれらすべてが、その議事録に内在する「モラル・サイエンス・クラブ」問題に答えていない。その第一の問題は、誰が創始者であったのか? というものである。第二の問題は、同クラブは 1890 年代半ばに、突然 distinguished なクラブに変貌を遂げるのはなぜか?

これら二つの問題を解く鍵は、ジョン・ネヴィル・ケインズの日記に隠されていた。それによれば、彼は、1874年4月28日にワードの部屋で開かれたモラル・サイエンス・クラブに参加し、ワードの報告「社会主義と共産主義」を聴講し討論している。ワードはもともと聖職者をめざしていたが、その急進的な思想により司祭への道が閉ざされていたとき、シジウィックの勧めでケンブリッジ大学に入学したノン・カレッジの学生であった。その後トリニティーのスカラシップを優秀な成績で取得することによってトリニティーへの所属が許可され、そこで部屋を得てクラブ開催にいたったのである。ネヴィルの日記には設立の件について何も言及がないので、おそらくネヴィルというよりもワードがシジウィックの示唆をうけて、モラル・サイエンス・クラブを設立したものと推測される。

同年ワードは第一位の成績で MST に合格する。ネヴィルも翌年2月10日に「功利主義の発展」という報告を行い、同じく MST にトップ合格している。このように、討論を通じて MST 試験準備をするというモラル・サイエンス・クラブの基本的目的はこの時確立していたのである。そして同じ目的を共有するが故に 1878年10月19日に設立されたクラブの名称は、「二年前に休会となった同名の組織との歴史的関連性を保つためにモラル・サイエンス・クラブとする」(第二項)と決議されたのであった。

第二の問については、(略)

List of Papers at CU Moral Sciences Club

Add 7831 (1)	28 Jan 1874	'returned to Cambridge'
Ward, James	29 Apr. 1874	Socialism and Communism
Keynes, John Neville	10 Feb. 1875	The Progress of Utilitarianism
Marshall, Alfred (MA)	17 Nov. 1875	American Industry
Keynes, John Neville (BA)	before 4 April 1876	Theories of Disbelief in the External World
MIN IX 39	19 Oct. 1878	
Macleod, Henry Dunning (MA, Vist.)	24 May 1879	The Modern Science of Economics
Caldecott, Alfred	25 Oct. 1879	Unconscious Cerebration
MIN IX 40	28 Feb. 1880	
Stout, George Frederick	11 Nov. 1882	Mill's theory of the syllogism
Stout, George Frederick (BA)	2 Feb. 1884	Psychology of Relation
Johnson, William Ernest (BA)	25 Oct. 1884	The empirical and critical philosophies
Sidgwick, Henry (President)	23 Oct. 1885	Comte's Conception of a spiritual Power
McTaggart, John M. Ellis	12 Feb 1886	The Moral Ideal of the Prolegomena of Ethics
Mackenzie, John Stuart	26 Nov. 1886	The Measurement of Pleasure
McTaggart, John M. Ellis	11 Feb. 1887	Buddhism
Soyeda, Juichi	4 March 1887	National Peculiarities in Economics
Mackenzie, John Stuart	20 May 1887	on Hegel's Dialectic
Dickinson, Goldsworthy Lowes	4 Nov. 1887	Plotinus
Ward, James (MA)	25 Nov. 1887	University studies, especially Philosophy
Bain, Alexander (Visitor)	1 June 1888	The Division of the Subject Sciences

McTaggart, John M. Ellis (BA)	26 Oct. 1888	Mr. Balfour and Transcendentalism
McTaggart, John M. Ellis (BA)	1 Feb. 1889	Mr. Balfour's Philosophy of Religion
Caird, Edward (Visitor)	7 Oct. 1889	The Mediaeval view of Religion and Ethics
Mackenzie, John Stuart (BA)	25 Oct. 1889	The Relation of Thought & Feeling
McTaggart, John M. Ellis (BA)	1 Nov. 1889	The Absolute of the Moral Ideal
Johnson, William Ernest (MA)	23 Jan. 1891	"Social Philosophy," a work by Mr. J. S. McKenzie
Stout, George Frederick (MA)	27 Feb. 1891	Belief
Sidgwick, Henry (President)	26 May 1893	Ethics of Naturalism
Stout, George Frederick (MA)	16 Feb. 1894	Floating Ideas
Mackenzie, John Stuart (MA)	2 Mar. 1894	Mr. Bradley's view of Self
Sidgwick, Henry (President)	26 May 1894	Philosophy of Common Sense
Webb, Sidney (Visitor)	26 Oct. 1894	Economic Basis of Trade Unionism
MIN IX 41-----	9 Nov 1894	
Russell, Bertrand (BA)	9 Nov. 1894	Geometrical Axioms, read by Sanger
Moore, George Edward (BA)	Oct. 1895	Kant's Ethical Principle ⁵
Moore, George Edward (BA)	6 Nov. 1896	Causality ⁶
Russell, Bertrand (MA)	25 Feb. 1898	The constitution of Matter
Russell, Bertrand (MA)	27 Jan. 1899	Classification of Relations
Moore, George Edward (MA)	20 Oct. 1899	Kantian Idealism ⁷
Jones, Emily Elizabeth Constance	1 Dec. 1899	On some points in Mr Moore's criticism ⁸
Russell, Bertrand (MA)	9 Feb. 1900	What is Sensation
Moore, George Edward (MA)	2 Nov. 1900	Reply ⁹
Russell, Bertrand (MA)	21 Feb. 1902	Do Psychical states have position in space?
Keynes, John Maynard	Oct. 1903	listed as undergraduate member
Keynes, John Maynard	19 Feb. 1904	elected as a member
Russell, Bertrand (MA)	2 Nov. 1906	The Nature of Truth
Keynes, John Maynard (BA)	6 Nov. 1908	Nature of Inference
Russell, Bertrand (MA)	3 March 1911	Knowledge by Acquaintance & K. by Description
Russell, Bertrand (MA)	3 Nov 1911	The relations of Universals & Particulars
Moore, George Edward (MA)	24 Nov. 1911	Our knowledge of an external world ¹⁰
Hicks, G. Dawes	8 March 1912	Bergson's theory of mind and Nature
Russell, Bertrand (MA)	Nov 1912	On Matter
Wittgenstein, Ludwig	29 Nov. 1912	What is Philosophy? ¹¹
Wittgenstein, Ludwig	28 Feb. 1913	attacked the view of the author
Russell, Bertrand (MA)	20 Oct. 1913	The Perception of Time
MIN IX 42-----	1916	
Ramsey, Frank	18 Nov. 1921	The nature of Propositions ¹²
Harrod, Roy (Visitor)	10 Nov. 1922	The Self
Ramsey, Frank (BA)	26 Nov. 1926	The idea of probability
Turing, Allan	1 Dec. 1933	Mathematics and Logic ¹³
Hayek, Friedrich von (Visitor)	19 Nov. 1942	The Facts of the Social Sciences ¹⁴
Popper, Karl (Visitor)	25 October 1946	Are There Philosophical Problems? ¹⁵
Tomo, Shigeki	28 Jan. 2007	attended

MSTの歴史

MSTの歴史は、モラル・サイエンスを構成する科目とその参考文献の変遷の歴史であった。それらは、ケンブリッジ大学の教育制度改革とともに呼称の変わった総勢 10 人未満の委員会組織【モラル・サイエンスならびに自然科学の新トライポスの諮問委員会 (Syndicate, 1847)、学習委員会 (Study Board, 1860 年～)、特別委員会

⁵ The draft housed in the Moore Papers, Add 8875 12/3/1

⁶ The draft housed in the Moore Papers, Add 8875 12/3/2

⁷ The draft housed in the Moore Papers, Add 8875 12/3/3

⁸ The draft housed in the Moore Papers, Add 8875 12/3/4

⁹ The draft housed in the Moore Papers, Add 8875 12/3/5 (a)

¹⁰ The draft housed in the Moore Papers, Add 8875 12/3/5 (a)

¹¹ Referred to in McGuinness, Brian (1988) *Wittgenstein A Life. Young Ludwig (1889 - 1921)*

¹² Reproduced in Rescher, Nicholas & Majer, Ulrich ed. (1991) *On truth : original manuscript materials (1927-1929) from the Ramsey Collection at the University of Pittsburgh / Frank Plumpton Ramsey*

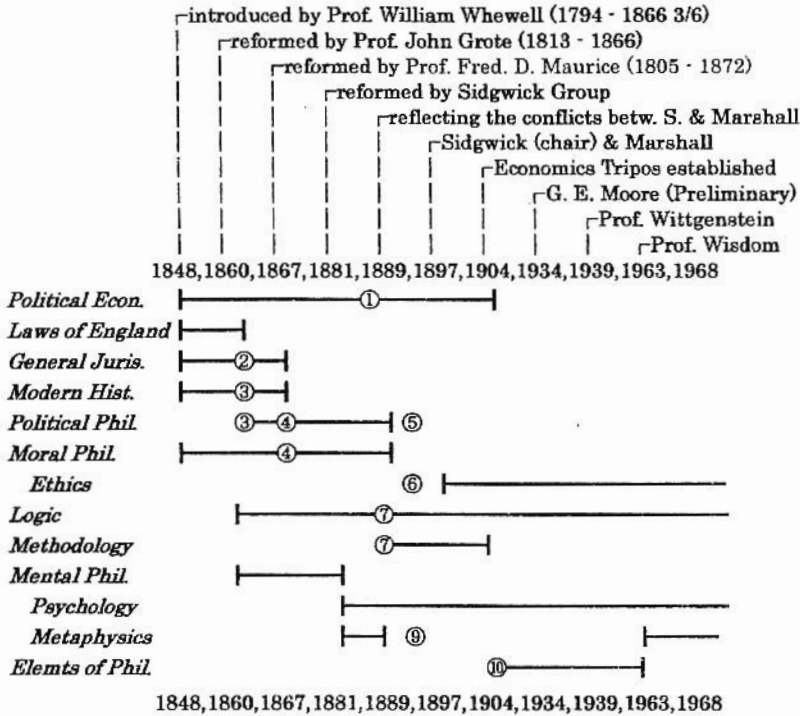
¹³ Hodges, Andrew (1983) *Alan Turing: the enigma* p.86

¹⁴ Reproduced in Hayek, Friedrich August von (1949) *Individualism and Economic Order, London*

¹⁵ Edmonds, David & Eidinow, John (2001) *Wittgenstein's poker: the story of a ten-minute argument between two great philosophers*, p. 1

(Special Board, 1883年～)、学部委員会(Faculty Board, 1926年～)】のメンバーによって決定され公表されてきた。いうまでもなく120年間にわたるMSTの歴史において、その時々々のメンバー、とりわけ、Chairmanのモラル・サイエンス観によってMSTの科目構成と参考文献は色濃く規定されてきたのであり、決して一様ではなかった。

MST subjects overviewed



└ CUR p. 249
 └ CUR p. 449
 └ CUR p. 454
 └ CUR pp. 941 - 49
 └ CUR pp. 481 - 483; CUA Min.V.10A
 └ Cambridge University Reporter 79/80 pp. 532-4
 └ Cambridge University Calendar
 └ Cambridge University Archive Min.V.10, at the top; CUC
 └ The Times, 1 Nov 1848; Whewell (1850) Appendix
 └ Cambridge University Calendar 1849 pp. 23 - 24

- ① *Advanced Political Economy* in Part II from 1883 to 1905
- ② *Jurisprudence* from 1860 to 1867
- ③ *History and Political Philosophy* from 1860 to 1867
- ④ *Moral and Political Philosophy*, moved by Maurice, from 1867 to 1889
- ⑤ *Politics* in Part II
- ⑥ *Ethics* in Part II
- ⑦ *Logic and Methodology* in Parts I & II.
- ⑧ *Philosophical Psychology and Empirical Psychology*
- ⑨ *Metaphysics* in Part II
- ⑩ The First Exam. on *Elemts of Phil.* took place on 31 June 1906.

- (1) 草創期問題: ヒューウェルがモラル・サイエンスに、歴史と法学を含め論理学を排除したのはなぜか。
- (2) 経済学トライポスの新設: それは、それまで権威として君臨してきたドンの死を契機に一気に加速した科目削除を伴う改革であったという点で、1867年の改革と共通点をもっていた。
- (3) MST Part II: マーシャルの尽力によって1889年MST Part IIでアドバンスト経済学を専攻する受験生は、形而

上学が免除されるという規定がもりこまれた。

(4) MST に関する誤解：シジウィック伝のケースと社会学

参考文献の変遷

構成科目の改訂に伴って、その学習のための参考文献が公表された。もちろん、科目構成の改訂がなくても、適宜参考文献表が学習委員会によって公表され、理事集会の承認を得た上で公表された。確かに、受験生もそれほど多くなく、試験官も科目数を超えたことはなかったが、決して象牙の塔における身勝手な内容が試験されたのではなかった。ケンブリッジの MA 以上という知性による承認をうけた参考文献と出題内容に従って試験が実施されていたのである。そしてそれは受験生の学習内容とコレッジのチューターの教育内容を拘束したという点で重要である。

ロンドン MA Branch III

モラル・サイエンス・コネクションは、ケインズ革命がロンドンではなく、ケンブリッジにおいて実現するための必要条件の一つであった。それは、父ネヴィル・ケインズがロンドン大学で BA 取得(1872年)後、非国教徒であるにも関わらず、ケンブリッジ大学に入学することを決意させた制度上の理由から説明される。

ネヴィルにとってケンブリッジ入学はあくまでロンドン大学で MA を取得するための手段に過ぎなかった。当時ロンドン大学の MA を取得するには試験を受けなければならなかったが、どこに居住していてもかまわなかった。ケンブリッジ大学やオックスフォード大学と違っていわゆるレジデンス・コードがなかったのである。それは、オックスブリッジの伝統的カレッジシステムから生じる学生への経済的負担をへらすために導入されたロンドン大学の画期的システムであった。そして、彼のめざす MA Branch III の試験科目は、ケンブリッジの MST のそれと完全にかぶっており、しかも、ケンブリッジからヴェンやフォーセットらが試験官となることがほぼ確実であった。こうなると、ケンブリッジ大学に席を置きながら、MST の試験準備をすることで、ロンドン大学の MA が取得しやすくなると同時に、ケンブリッジ大学 BA も同時に取得できる可能性がでてくる。

ネヴィルは、ペンブルック・コレッジ入寮直後に「数学は放棄しモラルでいく」という宣言をした。ここでいう「数学」とは数学トライポスのことである。当時数学トライポスで上位ラングラーとなることが将来のケンブリッジにおける上昇に必要不可欠なことと考えられていたので、いわばケンブリッジの伝統に反旗を翻すこととなった。実際、この宣言をうけて、フォーセット教授や指導を担当するフェロー(Searle,後のペンブルック学寮長)や父親といった周囲の人々から思いとどまるように説得されている。とりわけ、フォーセットとは同郷のソールズベリでケンブリッジに来る前から知り合っており、ペンブルック入寮後、盲目でありながら彼のほうからネヴィルの部屋を訪ねる(72年10月25日)という間柄であった。しかも、彼自身ロンドン→ケンブリッジという経歴の持ち主であり、数学トライポスでラングラーとなることによって、ケンブリッジ人として1863年の経済学教授職選挙の際に多数を制した経歴の持ち主であった。そのため、彼の説得はネヴィルにとってかなり衝撃的であり、相当「ブルーな気持ち」でいっぱいになってしまった。そこで仕方なくネヴィルは、翌年のイースター学期まで数学の勉強を続けるものの、学期終了時点で、数学指導担当者(W. Besant)に数学トライポス断念を告げその足で、ヴェンの部屋を訪ねて MST の指導をお願いしている¹⁶。

ネヴィルは、1875年11月29日(月)から12月5日までの5日間にわたる試験(経済学と論理学はジェヴォンズの出題¹⁷)を最優秀の成績をクリアして、Senior Moralists となった。この段階までは、シジウィックが個

¹⁶ Add 7829 (1873) 6/2: Besant は、1874年に出版された *Student's Handbook* の数学トライポス解説の著者であり、おそらく彼の個人的チュートリアルをまじめにこなしていれば、かなりの成績をとることができたはずであった。

¹⁷ Black, Robert Denis Collison ed. (1981) *Papers and correspondence of William Stanley Jevons* Vol. VII Papers on Political

人的に推薦するトリニティー・コレッジのモラル・サイエンス・スカラシップへの応募を断ったり(1874年4月16日)、指導教授にヴェンを選ぶなど、シジウィックとは距離をおいていた。しかし、この MST における成功は、ペンブルック・コレッジにおけるフェローの地位を彼に満場一致でもたらす(1876年8月)と同時に、シジウィックによる高評価を得、シジウィック・グループの一員として、教員のモラル・サイエンス・クラブの立ち上げと運営の要となり、1880年代の改革の戦力となっていく。いうまでもなく彼は1876年6月に実施されたロンドン大学 MA の試験を金賞でクリアしているが、この時すでに、ロンドンには彼にとって従の存在でしかなくなっていた。実際、1881年ジェヴォンズの後任としてロンドン大学ユニバーシティー・コレッジにおける教授職へ応募する話がもちあがったとき、結局辞退し、1925年12月31日にケンブリッジ大学登録局長の職を辞するまで徹頭徹尾ケンブリッジ人としての人生を全うするのであった。

結語

「人間行動や人間関係の道德原理または社会原理と関わる経済科学」¹⁸という把握にたつたヒューウェルによって、経済学がモラル・サイエンスの一科目として統合された。その結果、当時「富の学」と理解されていた古典派経済学を「人間の学(a study of men)」¹⁹として再編する契機が与えられた。言い換えるならば、モラル・サイエンス・コネクションは、ケンブリッジにおいて、方法論上、経済学を主観化する土壌を提供したのである。マーシャルは、その際、人間の満足の存在を認め測定するにはどうしたよいかという形而上学上の難問に直面し、個人の貨幣支出額に突破口を見いだした。この近似尺度に基づく余剰分析は19世紀における一つの到達点であった。その分析にはさまざまな付帯条件が必要とされるため、大勢の人から批判されたにもかかわらず、マーシャルは、『原理』の最終版に至るまでそれを撤回することはなかった。その意味でマーシャル経済学はモラル・サイエンス・コネクションの中に留まっていたのである。

オーストリア学派主観価値論のコンテクストとして、モラル・サイエンス・コネクションに匹敵するものが存在したのだろうか?…(略)…ローザンヌ学派についていえば、…(略)…

いずれにしても、経済学者はともかくとして、さまざまな論争を扱う経済学史研究者は、モラル・サイエンスの一科目としての形而上学の内容を心得ておく必要があるように思われる。シジウィックによって「形而上学」が明示的に MST の試験科目として導入された同時期(1880年代)に偶然、オーストリア学派内においても、形而上学的論争が表面化した。「貨幣または資本の一時的利用」に対して支払われるものとして利子を説明しようとするメンガーの利用説をペームが徹底的に批判している。『資本利子論の歴史と批判』第8章で展開されている批判内容は、「貨幣の利用」という無体物の存在に関わる議論であり、哲学史上、中世以来の普遍論争の延長上に位置づけられるものである。ペームの唯名論的立場と異時点間の交換として利子現象を説明する立場は最後までメンガーにうけいられることはなかった。最近のオーストリア学派研究書において、この特筆すべき論争について、哲学史は言うに及ばずモラル・サイエンス・コネクションの観点から充分解説したものは未だだされていない。

Economy Economic Papers hitherto uncollected extracts from the personal diaries 1856 - 60, List of additional writings, Jevons as examinee and examiner, Review of the theory of political economy においてジェヴォンズの出題が複製されているが、その出典は誤っている。Cambridge University Calendarではなく、Cambridge University Examination Papersである。paginationは正確である。

¹⁸ Collected Works of William Whewell, vol. 14 p.192

¹⁹ Marshall, Alfred (1920) - Guillebaud, Claude William ed. (1961) p. 14